

# 3000人に協力を呼びかけ収集

## キューアンドエー株式会社が仕分け済みマークを財団に寄贈

コールセンターの運営やICT（情報通信技術）のテクニカルサポート事業などを全国で展開するキューアンドエー株式会社（川田哲男社長、本社・東京都渋谷区）が、グループ会社とともに集めたベルマーク約7000点をベルマーク財団に寄贈しました。

同社は社会貢献活動のひとつとして2017年からベルマーク収集に取り組んでいます。今回届いたベルマークは、昨年8月から今年9月までの1年間に集めました。CSRに関する活動・広報業務を担う広報部が、グループ会社を含む約3000人の従業員や、親会社であるNEC ネットズエスアイにも協力を呼びかけ、大きな組織が一体となって取り組みました。

休憩室や執務室、自動販売機の横などに回収箱を置き、社内ネットや社内報で周知しました。広報部から全社へ送信するメールには、ベルマーク商品の紹介をフッターに記載し、社員に意識してもらえよう心掛けました。さらに各事業拠点では独自の「ベルマーク大使」を任命。参加の呼びかけをお願いして士気を高めました。

活動に賛同した親会社のNEC ネットズエスアイからも多くのベルマークが届きました。現在テレワークが中心で働く従業員も多い中、自宅で仕分けまで済ませてくれた方もいたようです。

仕分け・集計は、広報部と、同社のハピネス推進室か



⑥仕分けには紙コップを活用。BGMをかけながら和やかな雰囲気で行われた ⑦仕切り板を使ってコロナ対策もばっちり ⑧会話を楽しむ時間もあつた一方、無言で黙々と仕分けに集中した時間もあり、メリハリを意識したそう

ら集まった5人が担当しました。ハピネス推進室は従業員内の「幸福度」を高めるために昨年4月に設置された組織です。5人は、2日間の作業日を定め、集中的に取り組みました。

広報部の大野香穂里さんは、ベルマーク収集について「生活の中で、ちょっと意識するだけで出来る活動」と

表現します。さらに、「『ボランティア活動をするぞ』と構えることなく、コロナ禍であっても活動が続けられる」ことが、活動を継続できている理由だと分析しています。

今後の展望について、「誰かひとりが頑張るのではなく、従業員全員の意識を少しずつ高めることで、子どもたちへの支援につなげたい」と話してくれました。

# 全へき連大会、宮崎でリアル開催

## 公開授業はオンラインで配信

山間部や離島など都会から離れた地域の教育の在り方を研究し、当地の教育振興をはかる「全国へき地教育研究連盟」（全へき連）主催の全国大会（宮崎大会）が10月28、29の両日、宮崎県内の10会場で開かれました。コロナ禍の中、2年ぶりのリアル開催で、70回目の記念大会です。開会式や基調報告、記念講演を宮崎市民文化ホールで開く一方、ブロックごとの発表会や公開授業は現地の学校などからオンライン配信で行う、初めての「ハイブリッド型大会」でした。

開会あいさつの後、「夢を夢で終わらせない」と題して、競泳五輪メダリストの松田丈志選手を育てた熊本出身の元日本代表コーチ・久世由美子さんが記念講演。「選手の強化だけでなく、挨拶や返事、感謝の気持ちを大切に指導することで、息の長い選手に育ってほしかった」などと話しました。さらに基調報告があり、午後からは課題別分散会で全国12の小中学校の研究成果が発表されました。

北海道のえりも町立東洋小学校の発表では、児童が主体的に考えをもつために必要な時間の工夫などについて報告・討議が行われました。ここでは問い返しのむつかしさや少人数学級での学力格差、

異学年交流について、チャットによる質問も受け付けながら活発に議論が行われました。

また、長崎県の対馬市立乙宮小学校の発表では、「乙宮スタイル」と呼んでいる、主体的な学びの仕掛けづくりや児童同士で学び合う間接指導の設定などが紹介され、議論が進みました。

2日目は、宮崎県内8つの小中学校の公開授業があり、オンラインで配信されました。

五ヶ瀬町立三ヶ所小学校は職員児童合わせて約80人。オンライン配信では6年生の総合的学習などを公開授業しました。五ヶ瀬のふるさと五ヶ瀬の魅力に関心をもってもらい、自らが地域に貢献しようとする態度を養うことなどを目的にした授業です。

算数の授業を行った延岡市立方財小学校は、学習内容に応じたアウトプットの仕方を研究。自分のことばで説明したり、友達の意見も生かしながら自分の考えを再整理したりして説明できるかといった「アウトプット」の授業が展開されました。

全へき連の全国大会は来年、山形県での開催を予定しています。



⑤宮崎・五ヶ瀬町立三ヶ所小 ⑥宮崎・延岡市立方財小（いずれもオンライン配信）



# 特別支援学校にベルマーク寄贈

## キリンビバレッジの神奈川キャンペーン

協賛会社キリンビバレッジ（ベルマーク番号54）は、神奈川県で店舗展開する流通企業4社と実施したキャンペーンでベルマーク約3万点を集め、ベルマーク財団を通じて横浜市立本郷特別支援学校（中嶋浩一校長、児童生徒169人）に寄贈しました。

同社首都圏地区本部横浜支社の佐藤栄二支社長が11月16日、ベルマーク財団を訪れ、財団の小野高道常務理事に3万990点のベルマークを手渡しました。キャンペーンは三和、ビック・ライズ、京急ストア、相鉄ローゼンの4社とキリンビバレッジが5～6月に実施し、応募総数は4809通でした。小野理事は4社への感謝状を佐藤支社長に託しました。

寄贈先選ばれた本郷特別支援学校の中嶋校長は「ありがとうございます。みんなで使い道を考えてみます」と喜びを語ってくれました。



左からベルマーク財団の岡部敦郎事務局長、同小野高道常務理事、キリンビバレッジの佐藤栄二横浜支社長、同営業企画部の高橋渉主任

# 全国の31事業所でマーク収集

## ニチレイが4回目のマーク寄贈

協賛会社のニチレイ（ベルマーク番号88）が、グループ会社を含む全国の31事業所で集めた1万121点のベルマークを財団に寄贈しました。協賛会社になった2017年4月以来、毎年マークを集めて寄贈しており、これが4回目となります。

人事総務部総務・渉外グループの上野恭明さんと富田幸世さんが11月4日、ベルマーク財団を訪れ、1年間集めたベルマークを手渡してくれました。同社は各事業所に回収箱を設置し、いつでも収集に取り組める環境を作っています。「見えやすい場所に回収箱を置き、異動してきた人でもマークを集めていることがすぐ分かるようにしている事業所もありま

す」と話すのは富田さん。上野さんは「引き続き回収に協力してもらえよう、社内周知に力を入れていきたい」と目標を語ってくれました。



右からニチレイの富田幸世さん、上野恭明さん、財団の小野高道常務理事